

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520573

研究課題名(和文)生活者むけ日本語学習支援における教授者育成のための基礎的研究

研究課題名(英文)Foundational studies for teachers' training on "the Japanese language for living in Japan"

研究代表者

足立 祐子 (ADACHI, YUKO)

新潟大学・企画戦略本部・准教授

研究者番号：00313552

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、経験のある日本語教師へのインタビューから、入門レベルの教室活動での教師のふるまいについて分析を行った。インタビュー分析の結果、教師たちは非言語行動による理解の促進、学習者間の関係、自身の行動に対するモニターを重視していることがわかった。また、実際の移民対象のドイツ語教室の分析からも同様の結果が出た。これらを、インストラクションデザインの理論であるケラーのARCS(注意、関連性、自信、満足)モデルを参照して分析すると、量的には注意喚起が一番多いが、質的には関連性、自信の側面での教師のふるまいが学習者の意欲を高め、学習を維持することがわかった。

研究成果の概要(英文)：This study investigates and analyzes the teacher's behavior in the classroom of the beginner's course level. From the teachers' interview analysis come the following points: Firstly, Japanese teachers frequently use non-language behavior, and they think that's helpful to learners' understanding. Secondly, Japanese teachers make the learners' relation important. Thirdly, they always monitoring his behavior in their class. An analysis in the German classroom was the same result as the interview. Applying these results to Keller's model, "Motivational Design for Learning and Performance; The ARCS Model Approach", there are most items of 'Attention', but it became clear that items of 'Relevance' and 'Confidence' raised and maintained the will of learners.

研究分野：日本語教育学

キーワード：教師のふるまい ARCSモデル 入門期のクラス 学習意欲

## 1. 研究開始当初の背景

国内における外国人登録者数は 2005 年以降 200 万人を越え、2011 年度は一時的に減少したものの、外国出身者の定住化が進んでいる。一方、社団法人日本語教育学会は近年の急激な増加を見せつつある海外からの移住者に対応するため、第二言語としての日本語の学習プログラムの再構築に取り組んでいる。(平成 20 年度文化庁日本語教育研究委託「外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発 - 「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 - 2009 年 3 月) また、2008 年度文化庁委嘱事業として、コミュニケーション学院が「生活者としての外国人のためのモジュール型カリキュラムの開発と学習ツールの作成」の研究を、翌年には同じく文化庁委嘱事業として、社団法人日本語普及協会が、「学習者参加型カリキュラムの開発」の研究を実施している。

最近の研究をみると、学習者の多様化に対応して学習ニーズやカリキュラム開発等は、徐々に整備されつつあるといえる。しかし、支援者としての教授者および教授技術については十分な研究は今なお十分ではないと考える。また、日本語教師養成において現場に必要な教授技術について十分明示されていない。申請者らは、移民の言語教育システムや内容について研究を行っているが、そのなかでいかに教授者の役割が重要であるかを実感している。本研究が着目している教授技術とは学習者のアドバイザーやファシリテーター的存在としての教師がそなえるべき技術をさす。

## 2. 研究の目的

成人の日本語学習者の多様化から生じる、教授者の問題は上に述べたとおりである。多くの日本語教育研究者が主張するように、限られた時間で基本的な日本語が運用できるようになるためには、学習者自身が自律的に、かつ主体的に日本語学習に関わっていかな

ければならない。そして、この自律学習のために教師の新しい教授技術が求められる。本研究は移民的背景を持つ学習者に対して経験豊かな教師にインタビューし、その教室内でのふるまいについて具体的にリスト化することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は日本語教育の現場における授業の技術は習得可能であるという前提からはじまっている。さらに、本研究が想定する教授技術の概念は、奈須(2009)に従う。つまり、短期的に効果が見えるものではない、「こういう時にはこうすればいい」というマニュアル的なものではない(個別的・要素的な手続ではない)、「誰でも、どこでも、必ずうまくいく」という匿名的で脱文脈的なものではない、という3点に集約されるものが、本研究がめざす教授技術である。よって、「過度に抽象的で一般的な理念の理解に終始することが適切な実行行為を導きはしない」という点を十分考慮する一方で、「過度に具体的で特殊な技術の習得とその無配慮な行使」という点を排除することも意識する。(奈須 2009 年 pp.4-6)

したがって、これまでに明らかにされていない現象を把握し、教育の現場と密着した概念の抽出を試みるため、質的研究の SCAT の手法をとる。SCAT については 2014 年 4 月に名古屋大学大谷教授を講師として招き研究会を開き分担者、連携研究者たちでその方法について理解を深めた。<http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/index.html#01> (2015 年 5 月 25 日確認)

## 4. 研究成果

(1) 移民的背景の学習者がいる日本語クラスを担当した経験のある日本語教師 3 人にインタビューを行った。このインタビューから入門レベルの教室活動のふるまいとして、教師たちは、非言語行動による理解の促進、学

習者巻の関係、教師自身の行動に対する自己モニターを重視していることがわかった。

(2) 実際の移民対象のドイツ語教室の活動の録画分析(ドイツにおける調査から)からも(1)と同様の結果がでた。特に、実際の授業の分析では、インストラクションデザインの理論であるケラーの ARCS モデル(Attention 注意、Relevance 関連性、Confidence 自信、Satisfaction 満足)を参照して分析すると、量的にはAttentionの注意喚起が一番多いが、質的にはRelevance、Confidenceの側面での教師のふるまいが学習者の意欲を高め、学習を維持することがわかった。

(3)(1)のインタビュー結果を動機づけ(ドルニユイ)の枠組みで示したりリストは以下のとおりである。

a. 学習開始時に動機づけを喚起する段階

- ・ 学習過程に対する学習者の内在的な関心向上
- ・ 日本語及び日本語使用者に関連した統合的価値観の向上
- ・ 日本語学習全体に関する成功期待感の向上
- ・ 学習者が認める具体的な教室目標の明確化
- ・ 教材や授業活動と学習者との関連づけ
- ・ 現実的な学習者信念を作る手助け

b. 動機づけを維持し保護する段階

- ・ 教室内活動の単調さの打破
- ・ 「動機づけ」強化のためのタスクの工夫
- ・ 学習者の目標明示化のための工夫
- ・ 学習者に定期的に成功経験を与える
- ・ 学習者の不安誘発要素の緩和・授業内での言語不安解消
- ・ 多様な学習ストラテジー提示・学習者自身の学習に対する自信構築の促進
- ・ 学習者間の協力促進
- ・ 学習者の自律性を促進
- ・ 自己動機づけ能力の強化

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9 件)

足立祐子・松岡洋子、多様な学習者に対する授業技術再考 - なぜ学習者に柔軟に対応できる教師が求められるか? -、ヨーロッパ日本語教育連絡会議論文集、査読無、27 巻、2014、72-81

足立祐子・松岡洋子、今村和宏、「生活者としての外国人」に対する第二言語教育における教師の教授行動と学習意欲 - ドイツの移民に対する言語教育現場から日本語教育への提言 -、2014 年日本語教育学会秋季大会予稿集、査読有、2014、231-232

足立祐子、日本語教育等の養成に関する一考察、新潟大学国際センター紀要、査読有、第 8 号、2013、1-10

〔学会発表〕(計 11 件)

足立祐子・松岡洋子、柔軟に対応できる教師とは?、ヨーロッパ日本語教育連絡会議、2014 年 8 月 24 日、パトサルツ、ハンガリー

足立祐子・松岡洋子、入門レベル期における教師の授業コミュニケーション力とその評価について、カナダ日本語教育振興会、2013 年 8 月 24 日、トロント大学

足立祐子・松岡洋子、「動機づけ」機能に着目した教師の指導技術の体系化の試み、日本語教育学会春季大会、2013 年 5 月 26 日、立教大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

足立 祐子 ( ADACHI, Yuko )  
新潟大学・企画戦略本部・准教授  
研究者番号：00313552

(2)研究分担者

松岡 洋子 ( MATSUOKA, Yoko )  
岩手大学・国際交流センター・准教授  
研究者番号：60344628

(3)研究分担者

今村 和宏 ( IMAMURA, Kazuhiro )  
一橋大学・経済学研究科 ( 研究院 )・  
准教授  
研究者番号：80242361